Our Concept ～展示によせて～

UTaTané 代表　加藤 多笑

はじめに

2018 年の五月祭に初めて出展した UTaTané(うたたね)は，今回でちょうど 10 回目の学園祭出展を迎えた．「科学や学問との新たなつながりをデザインし，実践する」を理念に掲げ，　科学や学問の何を，なぜ，どのように伝え，参加者とともに考えることができるのか，日々議論と実践を重ねている．また，UTaTané は，現在，黎明期を経て，変革期のさなかにある．団体の制度を整備し，もともとは，理工系の院生を中心に始まったが，今年度，人文，社会科学系を専攻するメンバーが増えた．そして，先月，創設者から 2 代目へと代表を交代した．若干の緊張とともに，私は初めてこの Our Concept を書いている．

さて，本稿を始めるにあたって，あらかじめ，この文章が，あくまでも，団体の一人のものの見方，「世界」にすぎないことを，宣言しておきたい．本稿を読むよりも先に，設計者のこだわりが詰まった体験を通して，ぜひ，ユニークなメンバーそれぞれが見ている「世界」を体感していただきたい．また，みなさんに，何かをつくっていただくところから，展示が始まることは，私たちの企画の特徴である．体験を通して皆さん自身の「世界」を一度立ち止まって考えてみたり，一覧化されたワークシートや付箋の中に見える他の参加者の「世界」をのぞいてみたりすることを，存分に楽しんでいただきたい．その体験の上で，本稿に戻ってきていただければ幸いである．

この文章は，一人による，駒場祭期間中の深夜の走り書きにすぎない．それでも，展示を体験してくださった参加者の皆さんと，私を含む UTaTané のメンバーの双方にとって，この駒場祭での体験から，次へと進むための小さな踏み台になることを目標に，団体メンバーと交わしてきた議論を振り返りつつ，考えてきたことを書いてみようと思う．

展示制作に見る「ぼく」と「きみ」

さて，今年のテーマは**「ぼくの世界，きみの世界　~違いを感じ，科学を見つめる~」**である．昨年度の駒場祭を終えた後から，次に扱いたいテーマを，時間をかけて，メンバー総出で議論してきた．なぜ科学コミュニケーションを扱うこの団体がこのようなテ

ーマを掲げたかについては，前代表が書き下ろした五月祭のテーマ解説に任せ，ここでは，みなさんに今体験いただいたような展示を制作する，**私たちの活動の原動力(の一つ)が，「ぼくの世界，きみの世界」にあること**から，このテーマの一側面を言葉にしてみることにする．

きっと皆さんに体験いただいたであろう，展示の多くで，ワークシートや付箋を一覧化している[1]． 貼ったワークシートのお隣にあるワークシートの様子を覗いていただいてきた方や，いくつかの展示で導入している，他の参加者の回答に対してコメントをつけるワークシートや付箋を記入してくださった方もいるかもしれない．**そこには，少し似ていて，でも，確かに違った他の人の姿が浮かび上がっているだろう．**

みなさんにも体感いただいたであろう，**「きみ」の世界を見ることを，一番早くから楽しみにしてきたのは，私たち UTaTané の展示制作者だ．**どんな風に，この展示を作ってきたのかの過程を簡単に振り返りつつ，「きみ」の世界を味わい，共に考えることがどれほど重要だったのかを，ご紹介してみようと思う．

この秋が初披露となる展示[2]は，五月祭を終えた直後から，メンバーそれぞれの興味から，「問い」を，議論して探ってきた．興味を深め，言語化し，メンバーと共有し，議論する過程に，非常に多くの時間をかけてきた．たとえば，「無意識のうちに判断しているプロセスではどんなことが起きていて，それは一人ひとりどのように違うのだろう」という疑問が「買い物のものさし」へと，「人と人との間で手にしている情報に差異があることが，コミュニケーション上の問題にどのように作用しているのだろう」という疑問が「人物推測ゲーム」へと発展してきた．

「問いを考える」ためだけであれば，UTaTané のような場で，「きみ」の世界を見ることに，さしたるこだわりはないのかもしれない．学問は，問いを扱う一つの強力な形態であることは明白であるが，学問一般にとって，一般の人が考える世界はさして重要な要素ではないことも多いだろう．しかし，私が，「きみ」の世界と出会うことを心待ちにするのは，様々な問いの中でも，**多様な「きみ」と，社会と，科学と関わる一人の生活者として，気になって仕方がない問いを掲げているからなのだろう．** 一人の生活者として，同じ社会を，少し違った視点で生きる「きみ」の世界を垣間見て，共にそのありようを考えてみたいと思っている．

---

1 一方で，「かたちをかたどる」については，参加者ご自身と同時に体験する隣の人のみにフォーカスをあて，強い意図を持って一覧化をしなかった．

2 9展示のうち，7展示はこの秋に初披露している．残りの2展示も，参加者からの声に刺激を受けて，改良を重ねた．

もちろん，このような生活実践に根ざした問いに応えようとする探究は，生活者と共に，UTaTané がつくるような場で考える方法だけではない．生活者の世界を，学術的に明らかにする方法も存在している．たとえば，「エスノメソドロジー」と呼ばれる分野がある[1]．鋭意勉強中の，入り口立ったばかりの理解で言及するのはやや気がひけるが，会場にも置いてある参考文献をご覧いただきたいと一言添えた上で，ご紹介しよう．エスノメソドロジーは，たとえばテレビを見る，教室で学ぶ，病院に行くといった，**人々の生活が，人々に間で共通に理解された何らかの「方法」に基づいて行われているからこそ，何が起こっているのか理解できる**という考え[3]のもと，「人々の秩序(方法)」を明らかにする学問分野だ．「**人々の生活実践の中には，生活者が独自に持っている秩序があること」という前提が，特徴的である．**

人々の生活実践を成り立たせている秩序をトピックに扱い，学術的に観察者がフィールドワーク等を通して明らかにするエスノメソドロジーと，私たちの生活上のある場面を切り出してトピックとし，参加者と共に，私たちの生活の有り様を明らかにしようとする UTaTané の場は，明らかにする手法は違えど，知りたい対象は共通していると言えるだろう．たとえば，「みるみるオノマトペ」や「らくわく慣用句」では，言葉の感覚の共有のされ方や言葉の作り方などに着目している．どのようにして，言葉が話されているか，どのようなルールのもとで言葉が解されているのかは，エスノメソドロジーの研究対象の一つであると言えるだろう．

UTaTané の場とパラレルにあるとも捉えられる学術研究のエスノメソドロジーが強調する，**「生活者自身が秩序を持っていること」という前提は，今の私が，参加者と共に，私たちの普段の有り様を立ち止まって考えてみたいと思う，一つの動機になっている．**

さらに，私たちが，生活者として，「ぼく」と「きみ」の違い，それぞれの個別性を意識しながら，みなさんと一緒に考えてみたいのは，普段どうしているか，だけにはとどまらない．**どうすれば良いのかという規範をめぐる問題にもつながっている．**たとえば，「『専門家』を再考する」 では，「信頼できる専門家をどう見極め，どう関われば良いだろう？」という問いを掲げた．他にも，「『しかけ』をつくる」は，頑張らなくても自然と何かをしたくなる解決方法という一種の方向性を示しつつ，身近な問題をどのように解決すれば良いだろうか，解決することができるだろうか．という問いを示しているとも

3 この，何が起こっているかわかることを「説明可能である」と表現する．

言えるだろう．また，「対話リミットゲーム」では，制約(リミット)の下で，いかに振る舞うことができるかを探っている．

これら問いは，明確な一意の答えを想定しているわけではない．ここでは，「道徳」と「倫理」が区別されている伊藤[2]の議論を参照してみたい．一般的には，道徳と倫理は同義として扱われることも多いが，伊藤は，哲学者アラン・バディウ等の議論を引きながら，**一般的で画一的，普遍的な正しい価値を示す「道徳」に対して，「倫理」は，より個別の次元の話をしていると述べている．**状況は，その時に応じて個別的だ．また，判断する人もそれぞれの個別の生を生きている．それらを踏まえると，一般的な「道徳」がそのまま適用可能な現実など存在しない．一般的に当てはまる法則を考えるのではなく，様々な制約のもとで，それぞれの場面でどう振る舞うべきかを，逡巡しつつ考えることが，「倫理の次元で考える」ということである．

私たちが展示で掲げた「どうすれば良いだろう？」という問いは，様々な制約条件下を，様々な価値観で生きる「ぼく」や「きみ」が，どのように振る舞うべきかを問う「倫理」の疑問である．ゆえに，一つの絶対的な解が存在しない．それぞれの個別の状況が際立つ問いだからこそ，私たちは，一人ひとりの参加者の世界を垣間見させていただくことを，そこから議論が始まることを，非常に楽しみに待っている．

「ぼく」と「きみ」とで見つめる「科学」

さて，今年のコンセプトの副題には，~違いを感じ，**科学を見つめる**~　と掲げている．違いを感じ，までに比べて，「科学」が登場することを，やや唐突に感じる方もいらっしゃるかもしれない．私たちが，ここに「科学」を登場させた意味を二つ，書き記しておこうと思う．

一つには，「ぼく」と「きみ」の差異を，差異としてそのまま放置し，「みんな違ってみんないい」のまま終わるのではなく，**差異によって生じる問題があるなかで，どうするかを乗り越えるための，一つの手段として，科学や学問があると考えたからである．**

2021 年まで掲げていた理念である，「生活知と専門知の対話・交流を目指して」の一言に集約されるように，**UTaTané は，一般に極めて権威を持ちやすい科学や学問の権威性をできる限り排除し，フラットな対話空間を，試行錯誤しながら創ってきた．**一方で，専門知の本来の強みを活かしにくいと言う問題もあった．

私の専攻(に近い)科学社会学[4]の分野の論も，同じような流れを辿ってきている．科学社会学者のコリンズら[5]は，科学論の３つの波という概念を使って，化学論の流れを説明する[3]．科学論の第一の波は，科学の成果を信奉する姿勢を取る[6]．対して，第二の波は，科学革命の構造を書いたクーンを発端に，科学の知識が絶対的なものではなく，社会的に構築されてきたことを示し，その特権性を引き摺り下ろした．科学の民主化を進める議論だ．そして，**コリンズらは，自らの立場を第三の波に置く．第二の波が出した科学の有り様についての知見を全て受け入れながら，それでも，突き詰めれば専門知の意味がなくなってしまう相対主義に陥ることを避け，科学に備わる価値を擁護しようとした．**

コリンズらの議論を全面的に肯定するわけでは全くないが，「フラットに対話する」ことを超えて，相対主義に陥って終わりになることのない場を構築することは，私たちにとっても課題であるように思われる．

もう一つには，感じ方の異なる他者と共に，科学と関わらざるを得ない場面が日常生活のなかにあるからである．それは，原発の過酷事故や，コロナ禍を思い出してみても，明らかだろう．

今回，**UTaTané では，初めて，新型コロナウイルス感染症を直接の題材として扱った**．コロナ禍で，とある場所に行くべきか，そうでないかの判断を私たちはどのように決めているかを立ち止まって考えてみる「意思決定解析器」と，コロナ禍における専門家との関わり方をシミュレーションした「『専門家』を再考する」の２展示だ．展示制作の経緯説明としては，コロナ禍を扱いたくて考えたと言うよりも，**いつか別の話題でも発生するであろう科学と人とが何らかの繋がりを持つ場面を切り出してこよう**とした時に，コロナ禍の話題が今の参加者にとって最も身近であったから取り上げたというのが適切だろう．両展示ともに，コロナ禍を題材に，**科学と関わらざるを得ない緊急的な場面を想定した，“避難訓練”としての機能**を果たせるのではないか，と考えている．

ただ，コロナ禍において，おそらく最も重大な問題であったのは，否応なく全員が当事者となり，意見も立場もバラバラな状況であり，それでいながら，感染症の流行という特

---

4 専攻を始めたばかりであるので，正確なこの分野の「専門知」は，会場に置いてある松本三和夫編「科学社会学」などを参照してほしい．

5 邦訳されている，コリンズの第三の波を論じた本は，「我々みんなが科学の専門家なのか」「民主主義が科学を必要とする理由」(エヴァンズと共著)(以上，法政大学出版会)「専門知を再考する」(エヴァンズと共著，名古屋大学出版会)の３冊である．

6 コリンズ&エヴァンズは，マートン等を第一波の例として挙げる．ただし，マートンや第二波の論者の，コリンズ&エヴァンズによる引用には，やや誤解を招くような表現も多いように思う．

徴から，統一した意思決定をしなければならないことであったようにも思う．みんなが自粛しなければ，たったひとり自粛したところで意味がない．

藤垣[4]は，日本の科学コミュニケーションは，痛みを伴わず，生ぬるい側面があると指摘している．全ての人の利害が一致するわけではない社会で，ジレンマによって生じる痛みと，その乗り越え方話題も，これらの展示の先で扱ってみたい．

おわりに

今回の９展示で，私たちが皆さんと一緒に考えたかったのは，様々な距離にいる「ぼく」と「きみ」が，どんな違いを持っていて，それを踏まえれば，人と人，人と科学，人と社会の間により良い繋がりをつくることができるだろうか，という問いだ．私たちも答えを知らない絶対的な解のない問いであるので，ぜひ一緒に展示会場で，探ってみてほしい．そして，展示会場を出たあとにも，問いを持ち帰っていただければ，嬉しい限りである．

References

*解説に引用した文献は会場内に置いてあります．興味があるものがございましたら，ぜひお手にとってご覧ください．

[1]前田泰樹・水川喜文・岡田光弘 編　『ワードマップ　エスノメソドロジー 人々の実践から学ぶ』　（新曜社）

[2]伊藤亜紗　『手の倫理』　（講談社）

[3] コリンズ&エヴァンズ　鈴木俊洋訳『民主主義が科学を必要とする理由』（法政大学出版局）

[4]藤垣裕子・廣野喜幸『科学コミュニケーション論』（東京大学出版会）